

身近な自然観察？

盛口 満 自由の森学園 教諭

25



PROFILE

盛口 満
(モリグチ ミツル)

1962年生まれ。
千葉大学理学部生物学科卒業。
現在 自由の森学園中、高等学校教諭。理科を教えるかたわら、嵐山の自然、生物についてまとめた「飯能博物誌」を随時発行。

著書に「僕らが死体を拾うわけ」(どうぶつ社)、「谷んでこんな生物がいるの」(日経サイエンス社)、「ぼくらの昆虫記」(講談社)等がある。



“拾う” ことで見えてくる

身近な自然観察——そう題された講演を時々頼まれる。そしてある時思った。身近ってどこ？ そして自然って何？ さらには観察ってどうやるの？ でもそもそもなぜ身近な自然観察ってやるの？

僕は埼玉の山ぎわのとある学校の理科教師をしている。つい最近、学校の廊下を歩いていたら、「捜してたの」と半ば泣きそうな顔をしている高1のマイにばったり会った。「ゲッチョ(これは僕のあだ名)、生物だったら何でも受け取ってくれよ？」彼女はそう言って僕に封筒を手渡そうとする。いったい何なのだ、と思ったら話はこうだ。前夜、パンブキンバイを作るべく、鍋一杯に作ったカボチャの煮物を今朝見たら、ハエが卵を産みつけていたのだという。そして気が動転した彼女は、そのカボチャに産みつけられたハエの

卵を僕のところに持ってきた、というわけだ。

僕の自然観察のスタンスは「ものを拾う」ということである。生徒たちもそれをよく知っていて、何だかわからぬものは僕のところに持ち込んできて鑑定を頼む。マイの持ちこみもその延長上にあるわけだが、だからといってハエの卵なんぞ持ち込まれてもしょうがない。受け取るだけ受け取って、これはゴミ箱に処分した。

僕が「拾いもの」にこだわっているのは、生来拾いものが癖になっていることが一番大きい。小さい頃はドングリやら貝殻をひたすら部屋に集めまくっていた。だが、教員になってもなおそれが続いているのは、拾うというごく単純な作業を通していろいろなことが見えてくるのにあらためて気がついたからだ。

例えば、僕の学校周辺ではよく動物が交通事故に遭う。その死体を拾う。正直、教員になりたての頃はそれは気持ちの悪いものだった。せいぜい絵を描いた後、埋めるのが関の山だった。しかし、死体といってもそれはいろいろなことを教えてくれる。6年程の間に交通事故死したタヌキの死体は計33頭にのぼるが、このうち秋に見つけたものは18頭を数える。つまりタヌキの多くは秋に事故に遭う。なぜか。それはタヌキの子別れが秋に起こるからだ。まだ1頭の生活に慣れていない若ダヌキが、新しいテリトリーを求めていく途上で事故に遭う。そんな姿が浮かんでくる。

数、だけではない。拾ったタヌキを解剖してみる(これも最初はおそるおそるだった)。すると彼らの食生活の一端が見えてくる。僕の学校近辺のタヌキで胃内容物としてひんぱんに見られるのが残飯だ。人家近くをエサを求めてうろつくタヌキ……が事故に遭うというのもまたむべなるかな、だ。その解剖にちなんでちょっとしたエピソードを紹介したい。



“拾いもの”対決

僕の学校は創立まだ15年程だ。創立当初、僕が教員になったばかりの頃は理科室に標本はひとつもなかった。理科室といえば人体模型やらホルマリン漬などのあやしい品々が並ぶというのが相場だが、それがまったくなかったのだ。しかも、うちの学校は超がつくほど貧乏である。やむなく標本は自前でみつけろうことにした。そこで活用しようと思った

のが身近にあるタヌキなどの事故死体だ。これから骨格標本を作りだしたのだ。

骨格標本というものは案外作るのが簡単である。ひたすら鍋で水と一緒に煮て、ほどよいところに肉を取り

除けばよい。しかし、僕は拾いものは好きだがでんで無器用なのだ。せっかく死体を煮ても(こう書くとやはりすさまじい表現だが)せいぜい頭の骨を取り出すのが精一杯で、多数のパーツからなる手足の骨や背骨などはお手あげ状態だったのだ。こんな折、ミノルという生徒が入学してきた。彼は器用なうえ、マメであった。さっそく彼に水を向けてみる。と、彼がすっかり骨とりにはまってくれたのだ。

タヌキ、ムササビ、サル……彼の手によって完璧な全身骨格標本が次々と理科室にお目見えした。やがて身近な場所で拾える動物の骨格標本をひとそろい仕上げってしまった彼は僕にこう言った。「もっと大きなのが作ってみたい」と。そこで僕は北海道の海岸なら大きなもの落ちてるんじゃないの? とはなはだ無貴



▶ある日の理科室
——ヒキガエルが
持ちこまれた。



◀ある日の自然
観察会で、
クジラの骨骨と
ともに。

任な答えを返したのだった。

夏休み。彼は助言(?)のとおり北へ向かった。そして浜でキャンプをしながら歩いて、見つけた死体を次々に宅急便で学校に送りつけてきた。アザラシ、イルカ……。中でもたまげたのは、現地で丸一匹のイルカを見つけ、そこで3つに切り分け、送りつけてきたことだった。彼はそれを学校でドラム缶を使って煮て、全身骨標本に組み上げた。

「負けてはおれん」ちょっと僕もそう思った。彼がイルカなら僕はクジラを拾おう。はなはだ安直だがプライドだけはある僕はそう決心をする。拾いもののプロとして、地図とニラメッコしてポイントを推す。あたりをつけたのは今度は長崎県の五島列島。そして春休みに出かけた僕は、まんまとそこで、小型クジラの骨をいくつか見つけ満足したのだった。

その話を聞いたミノルは、5月の連休、五島へとヒッチハイクで出かけていった。そして彼は現地で子どもたちと仲良くなり、秘密の浜に家

内される。そしてそこでなんと丸3頭分程のクジラの骨を見つけ、漁船にその骨を積み上げて港へ戻り(子供たちの父親が漁師だったのだ)、またしても宅急便で学校に送りつけてきたのだ。これを見て、もう負ける勝負はすまい、と僕は素直に思った。



“身近”はどこだっていい

そんな彼が卒業を真近にひかえたある日、理科室にこもっていた。何をしているのかと見に行くと、彼は「フライドチキンの骨学」なるレポートを書いていたのだ。店で売られている有名なフライドチキン。あれにも骨は入っている(むろんニワトリの骨)。では一つひとつはこの部分か。何ピースあれば一羽分になるのか。彼はフライドチキンの肉は友人に食べさせ、骨を回収してそんなレポートを書いていたのだ。いわく9ピースで一羽分になる、とか足の部分のピースの左右の見分け方はこうだとか。まいった。そうなのだ。フライドチキンにも骨はある。そし



▶小型のクジラの背骨とミノル
——宅急便の骨はどき。

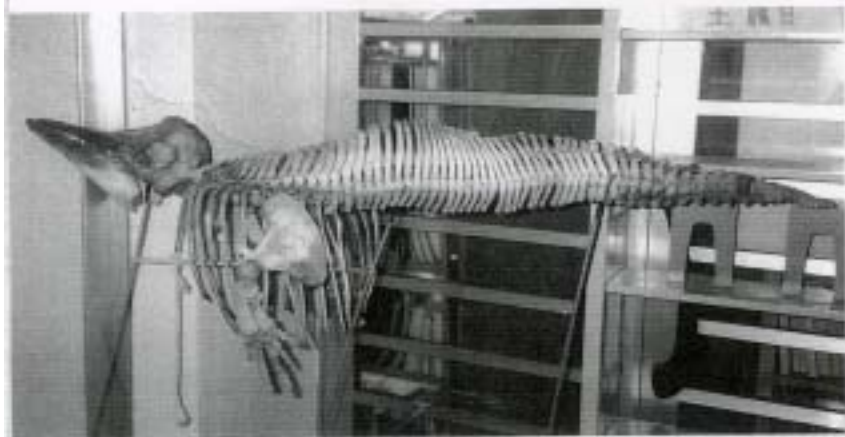
てそこからも自然は見えてくる。つまりは“身近”というのはどこだっていいのだ——そのことを僕はミノルに教わった。

しかしまだ問題は残っている。自然とは何か、そしてなぜ自然を見るのか、ということだ。ミノルの場合は骨とりのプロだから、フライドチキンにも骨を、そして自然を見た。でももっと普遍的なことは何だろう。



人間の存在って

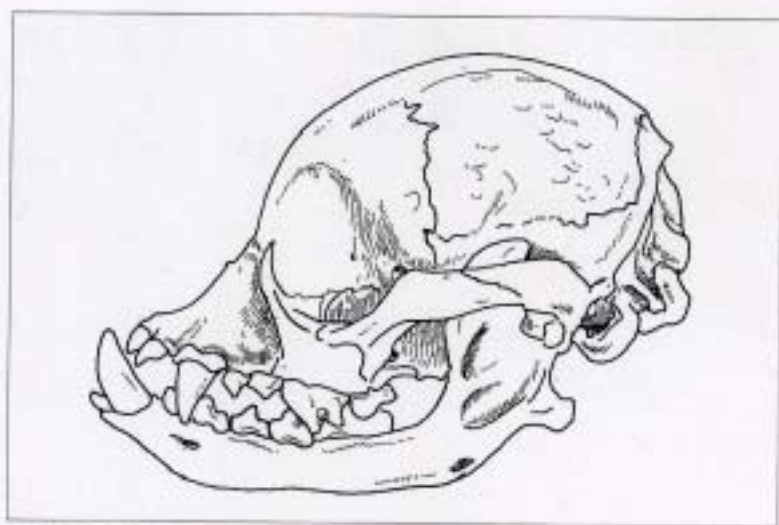
卒業後、ミノルからある日小包が届いた。中には動物の頭骨が入っている。下アゴがつきまわっているが、頭全体からするとアゴの割合は小さく、全体として丸い頭という印象を受ける。この頭骨を人に見せてまわるが、いったい何の動物が当たったためしがない。たいていは「サル?」という答えが返ってくる。一見サルを思わせるこの頭骨は実はイヌのも



のだ。ただ、チンという品種のものであろう。このイヌの場合、本来鼻づらが長く、アゴも長いイヌを品種改良して丸顔にしたものだ。このあやしい頭骨は、イヌというものは人間が作りだしたものだということを如実に物語ってくれる貴重な標本だ。ある種無理な改良を行ったために下アゴのほうが長く、歯の咬み合わせも悪い。こんなアゴの作りなら柔らかいものしか食べられなさそうだ。そして歯にはみごとに歯石がたまっていた。目の前の骨は確かにある動物のものなのだが、僕はこれを見て、人の存在が何であるかということを考えてしまう。

そう、自然というものはいまや人間の存在なしには考えられないのだ。交通事故死をするタヌキ、というものの自体も人の影響あつてのものだが、ここ数年こうしたタヌキを拾うことがなくなってしまった。その原因の一つとして考えられることは、この減少とほぼ同時に起きたタヌキの病気との関連である。この病気もともとベットのものの由来という。

地元の人に聞くと、タヌキはかつてはそう里でみる動物ではなかった、という。それが昭和40年代から一斉造林もあいまって、山から里へ降りてきたという背景がある。また、里には柿などの木の实や残飯というエサもあり、こうしたタヌキを引き寄せた面もある。そんなタヌキが事故に遭い、また病気にかかる。僕はそのことで単純にタヌキがかわいそうだ、と思っているわけではな



▲チンの頭骨。

い。そうしたことを引き起こす我々人間とは何者かということが気になっているのだ。ひいては僕個人が何者なのかが見えてこないかと思っているのだ。

自然は自分を照らす鏡

卒業したミノルはやがて初志貫徹(?)して、ドイツに骨格標本、ハクセイ専門学校なるものがあることを知り、おそらく日本人として初めてその学校へ留学した。今も夏休みのたびに帰国し、そこで学んだ成果を発揮し理科室に新たな標本をプレゼントしてくれる。そんな彼と一番最近会った時、自分のその技術や興味をどう生かしていくかすごく迷うと彼は言った。特に欧米では単なるハクセイ師になると、ハンターの獲物のトロフィー^{注1)}ばかり作ることになるそうだが、それは意に反するということなのだ。それはそう思う。

僕は拾いものが単純に好きだ。ミ

ノルも骨に単純に興味を持っているだろう。しかし、僕らはそこに埋没しようと思っではない。それを手がかりに自然を知りたいと思っている。繰り返しになるが、その自然というもののの中に人の歴史や今の人のあり様がつまっている。それを見ることは、自分たちがどこから来てどこにいるかを探ることなのだ。そしてミノルと同じく手がかりを持ちつつも、これからどこへゆくのかこそを迷う。

自然は自分を照らす鏡だ。

「ねえねえ、解剖しないの？」廊下を曲がったら、ぱったりはちあわせをした高1のサヤカにそう声をかけられた。「今度暇を作ってやるか」そう答える。

僕にとって、彼女にとって、世界を、そして自分を知る手がかりの断片になるかもしれない出会いがそこにある、と僕は思う。

注1) シカなどの頭部でつくった獲物のトロフィー